

## スピノザ哲学におけるコナトゥス概念の発展

### —『短論文』から『エチカ』へ—

笠松 和也

スピノザの主著『エチカ』第3部以降において、「各々の事物が自己の存在を保持しようとするコナトゥス (conatus)」(E3P7) は中心的な役割を担っている。コナトゥスは個物が実在し活動しようとする力であるとともに、神の力能をある一定の仕方では表現する力でもある。感情論においては、コナトゥスは何らかのことをなすように人間を規定する「欲望 (cupiditas)」として現れる。さらに自己のコナトゥスに合致する事物を表象する時、人間は「喜び (laetitia)」を感じ、反対に自己のコナトゥスに反する事物を表象する時、「悲しみ (tristitia)」を感じるとされる。『エチカ』ではこの三つが基本的感情とされ、愛、憎しみ、希望、怖れといったその他の諸感情は、すべてこの三つの派生として位置づけられる。コナトゥスはまさに感情論が成立する場面に関わっている。

本稿では、まず先行研究を補う形でコナトゥス概念の歴史を概観することで、スピノザがコナトゥス概念に新たな発想を導入していることを指摘する。そのうえで、初期著作『短論文』から主著『エチカ』にかけてその発想がどのように発展するかを追跡しながら、『エチカ』の感情論の特質を明らかにすることにしたい。

#### 1. コナトゥス概念の歴史

スピノザの思想的源泉を網羅的に調査したウルフソンの古典的研究では、『エチカ』のコナトゥス概念は自己保存の系譜と結びつけて理解されている<sup>1</sup>。まず、ウルフソンはキケロ、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥス、ダンテ、テレジオを参照しながら、自己保存の原則が古代からルネサンスまで幅広い文脈で見られることを確認し、近世においては共通の了解事項になっていたとまとめる。そのうえで、(1)伝統的に自己保存の原則が言及される際、*velle* や *appetere* など「衝動」を含意する動詞が頻繁に使われること、(2)それらの動詞が古典ギリシャ語の「衝動 (ὄρμη)」を受け継いでいる可能性があること、(3)同じく「衝動」と訳されうる *conatus*<sup>2</sup>も、キケロ『神々の本性について』において

appetitus とともに ὁρμή の訳語として用いられていることを指摘する<sup>3</sup>。近世においてはホッブズ『リヴァイアサン』で conatus は ὁρμή と関係づけられている<sup>4</sup>。それらのことから、ウルフソンはスピノザがいかなる典拠に拠ったとしても、『エチカ』の conatus と ὁρμή には歴史的なつながりがあると結論づける<sup>5</sup>。このウルフソンの指摘から 50 年ほど経つが、近年でも多くの研究がこの指摘を参照している<sup>6</sup>。

しかしこの指摘には問題もある。それは、ウルフソンが conatus の用例をキケロとホッブズ以外に全く示していない点である<sup>7</sup>。conatus が古代から ὁρμή の訳語として用いられたというウルフソンの主張を支える根拠は、キケロの用例 1 箇所のみである。キケロからホッブズまでの間に conatus という言葉がどのように用いられたのかという点は明らかにされていない。そこで、われわれは (1)近世における古典ギリシャ文献の翻訳での用法、(2)近世の自然学での用法、という二つの観点からウルフソンの研究を補うことを試みたい。

まず、近世における古典ギリシャ文献の翻訳での用法について考えてみたい。16 世紀から 17 世紀にかけて、確かにいくつかの文献で conatus は appetitus とともに ὁρμή の訳語として使われていることが確認できる。ここでは例を二つ挙げておく。一つは、エピクテトス『提要』のラテン語訳である。1540 年に刊行された Angelus Politianus による訳<sup>8</sup>では ὁρμή の訳語として conatus が用いられている。もう一つの例は、1586 年に刊行された Franciscus Portus によるクセノフォン『ソクラテスの思い出』注解の一節である<sup>9</sup>。そこでは ὀρμηκότε という語に註を付けて、ὁρμή と conatus を併記している。これらの用例から、確かに近世における古典ギリシャ文献の翻訳で conatus が一般に ὁρμή の訳語の一つとして用いられていたと考えられる。

次いで、近世の自然学での用法を見てみよう<sup>10</sup>。近世スコラの伝統では、conatus はアリストテレス自然学の枠内で用いられる概念であり、「駆動力 (impulsus)」や「傾向 (inclinatio)」とともに、物体が自然本性的にもっている傾向性として捉えられていた<sup>11</sup>。それに対して、ホッブズはアリストテレス自然学を批判して、機械論の中で conatus という語に新たな意味を与える。

コナトゥスとは、所与の空間と時間、すなわち明示的に規定されたり数によって指定されたりする空間と時間よりも、小さな空間と時間における運動、つまり点と瞬間における運動である。(De Corpore, III, Cap. XV)

近世スコラにおける用法と明らかに異なるのは、コナトゥスそれ自身が「運動」

と定義されている点である。感覚されうる運動の端緒となる、それ自体は感覚されえない小さな運動が「コナトゥス」と言われる。「インペトゥス (impetus)」や「力 (vis)」といった基礎的な概念は「コナトゥス」によって定義される。コナトゥス概念はホッブズの物体論を基礎づける場面で用いられるといえる。

「コナトゥスそれ自体が運動である」という発想は、1640年代はじめから光の屈折や人間の活動の問題にも適用される<sup>12</sup>。その一つの例が『リヴァイアサン』第1部第6章である。そこでは conatus の英訳に当たる endeavour を定義する際、「歩く、話す、打つ、そのほか目に見える活動が現れる前に人間身体の中にある、運動の小さな端緒 (small beginnings of motion) は、一般的に努力 (endeavour) と呼ばれる」と述べられる。この箇所でもコナトゥス [=努力] は感覚されうる運動の端緒としての感覚されえない小さな運動と位置づけられる<sup>13</sup>。

続けてデカルトも見てください。デカルトもまた自らの機械論の中で conatus を捉え直している。『哲学の原理』第3部第56項「魂をもたない諸事物において運動へのいかなる傾向力 (conatus) が知解されうるか」には次のようにある。

第二の元素の小球が回転しているその中心から遠ざかろうとすると私が言う時、その小球が何らかの思惟を有し、そこからその傾向力が生じると、私が唱えていると考えてはならない。そうではなくて、単に小球が他の原因に妨げられないかぎりその方向へ進むように、位置づけられ運動を与えられていると考えられなくてはならない。

直接的に批判されているのは、イタリア・ルネサンス自然学に見られるアニマ論的な自然現象の理解と思われるが、同時にこれはアリストテレス自然学への批判にもなっている。ここでいうコナトゥスは、物体が自然本性的にもつ傾向性ではなく、物体がある位置においてある運動へと向かう「力 (vis)」である。この一節には「力」という語は見られないが、第55項で「第二の元素の小球が中心から遠ざかろうとする力 (vim, qua sic globuli secundi elementi [...] recedere conantur ab istis centris)」と言われるとおり、コナトゥスは「力」として捉えられている。

以上のことから、近世において conatus という言葉は、古典ギリシャ文献の翻訳で一般に ὁρμή の訳語の一つとして用いられていた一方で、自然学分野ではより限定された意味で用いられ、アリストテレス主義から機械論への移行を経て、その位置づけが大きく変化したといえることができる。スピノザが『形而上学的思想』で「事物とその事物が自らの状態を保持しようとするコナトゥスはどのよう

に区別されるのか」を論じる文脈で、「運動は自らの状態を保持しようとする力をもつ。この力はまさに運動そのものに他ならない。つまり運動の本性はそのようなものである」(CM 1/6) と述べる時も、機械論の中で捉え直されたコナトゥス概念を確かに受容している。その点でスピノザはホッブズやデカルトと同じ側にいるといえる。

しかしその一方で、『形而上学的思想』以前に書かれた『短論文』では、スピノザは機械論とは全く異なる発想の下でコナトゥス概念を捉えている。しかもその発想は『エチカ』にも受け継がれることになる。スピノザのコナトゥス概念の特質を明らかにするには、『短論文』から『エチカ』にかけてのコナトゥス概念の発展を追跡しなければならない。

## 2. 『短論文』における「摂理」

スピノザは『短論文』第1部第5章において、「神の特質」の一つとして「摂理」を説明する場面で、「コナトゥス」に相当する概念を導入する。

われわれが [Proprium ないし] 特質と呼ぶところの第二の [神の] 属性は摂理 (Voorzienigheid) である。それは、われわれにとっては、全自然や個物において見いだされる、自己の存在の保存と保持へ向かう努力 (poginge) に他ならない。というのは、いかなる事物も自己自身の本性によって、自己自身の破壊を試みることはありえないだろうし、それとは反対に各々の事物は自らのうちに、自己自身と自己の状態を保持し改善する努力を有することは明らかだからである。

「努力」と訳した poginge は、『オランダ語訳遺稿集』(NS版) 所収の『エチカ』では conatus の訳語として用いられている。また、上記の引用箇所を『エチカ』と比較するなら、「いかなる事物も自己自身の本性によって、自己自身の破壊を試みることはありえない」という部分は、第3部定理4「いかなる事物も外的原因によってでなくては破壊されえない」に相当し、「各々の事物は自らのうちに、自己自身と自己の状態を保持し改善する努力を有する」という部分は、第3部定理6「各々の事物は自己においてあるかぎり自己の存在を保持しようとする」に相当するように思われる。ここでいう poginge は、『エチカ』のコナトゥス概念の先駆的な形態として見ることができる。

だがここで *conatus* の訳語である *poginge* という言葉とともに、「摂理」という神学的な術語が用いられていることの意味も考えておかなければならない。スピノザは『短論文』の中で「摂理」をはじめ「予定 (*Praedestinatie*)」(KV 1/6)、「再生 (*Wedergeboorte*)」(KV 2/22)、「悪魔 (*Duyvelen*)」(KV 2/25) といった神学的な術語を用いる。これにはおそらく当時のカルヴァン主義の中での宗教論争が背景にある<sup>14</sup>。しかしだからといって、スピノザが『短論文』を通して神学的な論争に加わろうとしたとは考えられない。神学的な論争に応答するならば、神の摂理を論じる際には、神の意志と人間の自由意志の関係が当然論じられなければならない。だがここで論じられるのは、内容的に言えば自己保存の問題である。また、神の予定を論じる際には、人間の救済の問題が扱われるべきだが、第1部第6章で「神の予定」として論じられるのは、諸事物が偶然的ではありえないということである。むしろここで「摂理」や「予定」といった術語が用いられるのは、神学的な諸概念をスピノザ哲学の中で翻訳する試みであると捉えるべきである。

先の引用に続く箇所、「普遍的摂理 (*algemeene Voorzienigheid / providentia generalis*)」と「個別的摂理 (*bezondere Voorzienigheid / providentia specialis*)」の説明がなされている箇所もそうした試みの一つだと考えられる。この区分自体は摂理の一般的な区分で、普遍的摂理は神が全自然に秩序を与えることを指し、個別的摂理は神が個々の被造物に秩序を与えることを指す。だがここでも神学的な諸概念はスピノザ哲学の中で捉え直されている。

普遍的摂理とは、それによって各々の事物が全自然の一部分であるかぎりにおいて産出され維持されるところの摂理である。個別的摂理とは、各々の個物が自然の一部分としてではなく一つの全体としてみなされるかぎりにおいて、自己の存在を保持しようとして有する努力である。

普遍的摂理は各々の事物が全自然の一部分として見られた場合の摂理であり、個別的摂理は各々の事物がそれ自体で一つの全体として見られた場合の摂理である。この箇所に続く例では、人間身体の四肢が人間身体全体の一部として維持されることは普遍的摂理で、人間身体の四肢がそれ自体として維持されることは個別的摂理とされる。普遍的摂理では諸事物どうしの全体・部分の関係の中での維持が問題になるのに対して、個別的摂理では諸事物それ自体における維持が問題になる。『短論文』ではこの二つが「努力 (*poginge*)」という概念の下で理解される。

一方、『エチカ』ではここでのいう個別的摂理のみがコナトゥスに相当する。普遍

的摂理で問題となる諸事物どうしの全体・部分の関係を論じるには、「運動 (motus)」概念を用いなければならない。「人間身体を構成する諸部分は、それらが自らの運動をある一定の割合で相互に伝達するかぎりにおいてのみ、その身体の本質に属し、[...] 人間身体との関係なしに個体として考えられうるかぎり、その身体の本質に属さない」(E2P24D) とされるように、人間身体の諸部分が人間身体と全体・部分の関係で語られるには、諸部分どうしの運動の割合が一致していなければならない。この観点は『短論文』の「摂理」を論じる箇所には見られない<sup>15</sup>。

われわれはここで二つのことを指摘しておきたい。一つは、この箇所ですべて「神の摂理が個物の自己保存として現れる」という、奇妙な事態が生じていることである。一般に神の摂理は神が全自然とすべての被造物に秩序を与える活動であり、神の知性と意志の両方に関わるとされる<sup>16</sup>。他方、個物の自己保存はむしろ個々の魂の欲求というレベルで論じられる。両者は全く異なる主題である。実際、トマス・アクィナスは『神学大全』第1部で「神の摂理」を「神の本質に属する事柄」のうちの「神の作用に属する事柄」の一つとして位置づけ、神の知性と意志の両方に関わるものとして「神の予定」とともに論じるが、そこで個物の自己保存に言及することはない。自己保存の欲求が問題となるのは『神学大全』第2部の人間論においてである。この位置づけは近世においても変わることはない。17世紀オランダのスコラ哲学者ヘーレボルトは『 pneumatica 論 (Pneumatica) 』で「神の摂理」を「神の外的な活動」の一つとして規定し、「神の創造」「神の保存」「神の協力」「神の統治」と並べて論じているが、やはりそこでも個物の自己保存は問題とならない。自己保存の欲求は『倫理学講座 (Collegium Ethicum) 』で魂の欲求の問題として論じられる。中世盛期スコラと近世スコラを代表する二人の哲学者の議論と対比した場合、『短論文』が神の摂理と自己保存を結びつけるのはいかにも奇妙である。

神の摂理と自己保存が結びつくとはどういうことなのだろうか。ここでわれわれは改めてこの節の最初に引用した箇所を思い起こさなければならない。「われわれが [Proprium ないし] 特質と呼ぶところの第二の [神の] 属性は摂理である。それは、われわれにとっては、全自然や個物において見いだされる、自己の存在の保存と保持へ向かう努力に他ならない」。神の摂理が「われわれにとっては (by ons)」自己保存であると言われている点に注目しなければならない。この表現の根底には「神の活動をわれわれの側から見れば自己保存として現れる」というスピノザ固有の発想が見いだされる。この発想を通して、伝統的には交わることの

なかった神の摂理の問題と個物の自己保存の問題が結びつけられる。

もう一つ指摘すべきことは、この箇所では自己保存が論じられるにもかかわらず、そのことが『短論文』第2部の感情論と全く関わっていないことである。伝統的にいえば、個物の自己保存は魂の欲求の問題であるため、当然感情論と結びつくはずである。例えば、ヘーレボルト『倫理学講座』では、魂の欲求能力は「諸感情を感得する座 (sentiens sedes affectuum)」であり、感情は「善が生じることに對する欲求、または悪が生じることに對する嫌悪による、人間の内的な運動」と定義されていた<sup>17</sup>。人間が自己保存のために善を求める欲求や悪を避ける嫌悪をもつこと自体が感情をもつこととされる。こうした感情の規定は少なくとも近世では広く一般に見られるものである。しかし『短論文』においては、神の摂理は個物の自己保存として現れるものの、諸感情の定義と関わることはない。神の摂理のこの規定は、あくまで神の特質の一つを明らかにする文脈に置かれていると見るべきである。この点は『エチカ』と決定的に異なっている。後に見るように、『エチカ』では感情論を基礎づける局面でコナトゥス概念が現れるからである。

われわれは以上の二つの点を踏まえた上で、『エチカ』へと歩みを進めることにしたい。

### 3. 『エチカ』における「コナトゥス」

『エチカ』でコナトゥス概念が導入されるのは第3部定理6である。「各々の事物は自己においてあるかぎり自己の存在を保持しようとする」という同定理は、次のとおり論証される。

というのは、(a)個物は神の諸属性がある一定の仕方で表現される様態（第1部定理25系より）、(b)つまり（第1部定理34より）神が存在し活動するところの神の力能をある一定の仕方で表現する事物であるが、(c)いかなる事物も自らのうちにそれによって破壊されるところの何か、つまり自らの実在を取り除く何かを持たず（この部の定理4より）、(d)反対に自らの実在を取り除きうるすべてのものに対立するので（前定理より）、(e)それゆえできるかぎりそして自己においてあるかぎり、自己の存在を保持しようとするからである。Q. E. D. (E3P6D、(a)～(e)は引用者による)

『エチカ』第1部においては「神は諸事物の実在の作用因であるだけでなく本質

の作用因でもある」(E1P25) ことから、諸事物が何らかの活動をなすことは、諸事物が「神によって何らかのことをなすように規定されている (a Deo ad aliquid operandum determinata est)」と位置づけられていた。しかしその時点では、神によるこの規定が個物においてどのように現れるのかは、まだ十分明らかになっていない。第3部定理6の論証が示しているのは、神によるこの規定が個物において自己保存として現れるということである。

同定理の論証の解釈をめぐっては、ヴィルヤネンがまとめるとおり、これまでのスピノザ研究においては大きく二つの傾向が認められる。(a)と(b)からなる論証の前半に重点を置くか、(c)と(d)からなる後半に重点を置くかである。このことは論証の前半と後半の関係をどう考えるかということとも関わっている。ヴィルヤネンはこの二つの傾向に対して、前半と後半の両方が不可欠であると指摘し、前半の力動的な枠組みの中に後半の論理的な関係を組み込むことがこの論証の役割であると解釈する<sup>18</sup>。この解釈は、『エチカ』全5部の註釈をしたマシュレの解釈とも基本的に同じである<sup>19</sup>。『エチカ』解釈としては、二人の解釈は確かに妥当であろう。しかし『短論文』の視点から見た場合、論証の前半と後半の関係はより鮮明になるように思われる。論証の流れを追いながら考えてみたい。

論証ではまず(a)と(b)によって個物の存在論的な位置づけが示される。(a)はほぼ第1部定理25系の文言<sup>20</sup>のままだが、そこに第1部定理34(「神の力能は神の本質そのものである」)を加えることで、神の本質を構成する「神の属性」を「神の力能」に置き換えている。個物の存在論的な位置づけを「力能」という言葉の下で規定し直しているといえる。これは『短論文』にはなかった部分である。『短論文』では「われわれにとっては」という表現があるのみで、個物の存在論的な位置づけは明らかにされていなかった。第3部定理6以降、「個物の力能」や「事物の力能」といわれるのは、個物が神の力能をある一定の仕方で表現しているという意味においてもっている力能を意味する。次に(c)と(d)によって、(1)諸事物が自らを破壊しえないこと、(2)諸事物が自らの実在を排除するものに対立することが、諸事物の本質から論理的に帰結すると示される。前節でも示したとおり、(1)に当たる記述は『短論文』においても見いだされる。ここでは(2)の記述を加えることで、一つの事物における論理的な関係だけでなく、諸事物どうしにおける論理的な関係も含めている。以上のことから、(e)で神の力能が個物においては自己保存として現れることが導出される。ここにおいて、「神の活動をわれわれの側から見ると自己保存として現れる」という『短論文』の発想は、「力能」と「表現」という言葉の下で存在論的に捉え直される。



しかしながら、これ以降の『エチカ』の歩みは『短論文』とは決定的に異なる。定理6で導入されたコナトゥス概念は、続く定理7で「現実的本質」と規定されることで、コナトゥス概念は感情論と結びつけられる。以下、このことを順に追っていきたい。

定理7では次のように言われる。「各々の事物が自己の存在を保持しようとするコナトゥスはその事物の現実的本質 (*actualis essentia*) に他ならない」。この定理の論証は要点を示せばこうである。(1)事物の本質とその帰結という観点から見た時、事物が活動するという事は、事物の本質から何らかの結果が必然的に帰結することを意味する。事物はその本質から帰結すること以外のことはなすことができない。(2)ところで、定理6では事物の活動が自己保存のコナトゥスとして現れることが示されていた。(3)それゆえ、事物が自己の存在を保持しようとする事は、事物の本質から結果が必然的に帰結することと同じ事態を指すといえる。この点において、事物のコナトゥスはその事物が何らかの事をなすように自身を規定するという意味での「本質」、すなわちその事物の「現実的本質」であるといわれる。

「現実的本質」という概念をめぐるのは、スピノザ研究ではしばしば対概念として「観念的本質 (*essentia idealis*)」が想定された上で、それらの違いが問題とされてきた<sup>21</sup>。だがここで重要なのは「現実的本質」の対概念を探すことではない。むしろ神の力能によって事物が必然的に活動するという存在論において、「現実的本質」という概念が「何らかの事をなすように規定する」という表現と結びついていることの方が重要である。この結びつきが意味するのは、事物がいかなる活動をしようとも、その活動は事物の本質としてのコナトゥスによって説明される、ということである。ここにおいて、コナトゥスは「現実的本質」という名の下で、事物のあらゆる活動の説明原理として位置づけられる。

コナトゥスが現実的本質だとされることは、コナトゥス概念を感情論と結びつける上で決定的な役割を担っている。なぜならその規定は「欲求 (*appetitus*)」や「欲望 (*cupiditas*)」の定義のうちに現れるからである。「このコナトゥスは […] 精神と身体に同時に帰される時、欲求と呼ばれる。したがって、欲求は人間の本質そのもの、つまりその本性から自己の保存に役立つことが必然的に帰結し、そうして人間がそのこと [= 自己の保存に役立つこと] をなすように規定されるところの人間の本質そのものに他ならない」(E3P9S)。また、「欲望」は「人間本性のあらゆるコナトゥス」を含むものとされ、「人間の本質に与えられた何らかの変状にしたがって何らかの事をなすように規定されたと考えられるかぎりでの人

間の本質そのもの」(E3AD1)と定義される。欲求や欲望はそれ自体が人間のコナトゥスであり、人間がそれによって何らかのことをなすように規定される場所の人間の本質そのものである。ここにおいてもまた、「何らかのことをなすように規定する」という表現が見られることに注意しなければならない。欲求や欲望は人間のあらゆる活動の説明原理として位置づけられるのである。

こうした欲望の定義を踏まえて、欲望とともに基本的感情に数えられる「喜び (laetitia)」と「悲しみ (tristitia)」もまた、コナトゥス概念との関係の下で新たな規定が与えられる。自己のコナトゥスに合致する事物を表象し (imaginari)、自己の活動力能 (agendi potentia) が増大することを感じる時、その表象は「喜び」と呼ばれる。反対に自己のコナトゥスに反する事物を表象し、自己の活動力能が減少することを感じる時、その表象は「悲しみ」と呼ばれる。欲望の定義とは違って、「活動 (actio)」と「表象 (imaginatio)」という二つのレベルが見いだされる点に注目すべきである。人間の活動それ自体についていえば、人間の現実的本質であるコナトゥスによって説明される。コナトゥスは人間のあらゆる活動の説明原理であり、人間は決して自己のコナトゥスに反して活動することはない。しかし、表象を通して認識される自己以外の事物は、自己のコナトゥスに合致することもあれば合致しないこともある。自己の活動と表象との間でのこのずれが活動力能の増減として表現され、受動的な喜びや悲しみとして捉えられる。愛と憎しみ、希望と怖れ、安心と絶望といった諸感情は、基本的感情である喜びと悲しみの派生として考えられるため、活動と表象というこの二つのレベルは、感情論全体において見いだすことができる。

『短論文』から『エチカ』にかけてのコナトゥス概念の発展は、こうして感情論の枠組みそのものの変更を要請する。このことは、感情にしたがう人間の活動をどのように記述するのかという問題に根本的な変化をもたらすことになる。

#### 4. 結論

ここまでの考察をまとめよう。スピノザは『短論文』でコナトゥス概念に新たな発想を導入した。「神の活動をわれわれの側から見れば自己保存として現れる」という発想がそれである。この発想の下で、歴史的に結びつくことのなかった神の摂理の問題と個物の自己保存の問題が結びつくことになる。『エチカ』においてもこの発想は受け継がれるが、コナトゥス概念は存在論的に規定し直され、人間のあらゆる活動の説明原理としての「現実的本質」という位置づけを与えられる。

これによりコナトゥス概念は感情論と結びつく。だがそこで成立する感情論は、活動と表象という二つのレベルで人間の活動を捉えるものである。その点で、感情論の枠組みそのものが『短論文』から根本的に変更されている。

この変更は哲学史の視点から見ればいっそう明らかである。伝統的に論じられてきた感情と理性の対立が、『エチカ』では前提となっていないからである。

哲学史を見れば、古代から感情は理性に反するものとして位置づけられるのが一般的であった。例えば、トマス・アクィナスは『神学大全』でダマスクスの聖ヨアンネスの言葉を引きながら、「情念 (passio)」を「善や悪を見て取ることによる魂の理性的でない運動 (motus irrationalis animae)」<sup>22</sup>と定義する。近世スコラの枠組みに拠るならば、ゴクレニウスが『哲学語彙集』で整理するように、感情にしたがって活動することは「動物的欲求 (appetitus animalis)」によって説明され、理性によって活動することは「理性的欲求 (appetitus rationalis)」ないし意志と知性によって説明される<sup>23</sup>。スピノザもまた『短論文』においては、「臆見」から生じるすべての諸情念を「善き理性に反する」ものとしていた<sup>24</sup>。

しかし、『エチカ』における感情論では、諸感情は人間のあらゆる活動の説明原理としてのコナトゥスとの関係の下で規定されている。そこでは感情と理性の対立は前提されていない。確かに感情は受動的であるかぎり表象による認識から生じるという点で、理性による認識からは区別されるものである。しかし、われわれが前節で見たとおり、感情が成立するのは活動と表象のずれが生じる次元においてである。理性が活動を十全に捉えるからといって、感情と理性の対立が問題となるわけではない。むしろ問題となっているのは、活動と表象の関係である。この意味において、コナトゥス概念の発展は伝統的な感情の議論に一つの切断をもたらすことになる。

われわれは『エチカ』の感情論を解釈することを通して、哲学史におけるこの切断が何をもちたかということを考えなければならない。その考察こそが、『エチカ』の感情論の特異性を明らかにすることになる。

---

本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> Wolfson (1962, II, 195-201)

<sup>2</sup> conatus は「～しようとする」「～を試みる」という意味の動詞 conari の完了分詞で、「努力」「衝動」「試み」と訳されうる。

<sup>3</sup> ウルフソンが指摘するのは、キケロ『神々の本性について』第2巻の次の一節である。「[宇宙以外の] 他の諸本性が自らを産み殖やすところの種子によって維持されているように、宇宙の本性はあらゆる意志的な運動、コナトゥス (conatus)、衝動 (adpetitus) —これらはギリシャ

人たちが *ὄρμη* と呼ぶものだけが—を持っており、われわれ自身が魂によって運動したり感覚したりするように、宇宙は「自らの本性がもつ意志的な運動、コナトゥス、衝動と」適合する活動を有する」(*De Natura Deorum*, II, 58.)。この箇所が *conatus* を *ὄρμη* の訳語として導入した最初期の例であることは確かである。ちなみにキケロは『義務について』第1巻では *ὄρμη* の訳語として *appetitus* のみを挙げている。「魂の力と本性は二つある。一つは、ギリシャ語で *ὄρμη* である衝動 (*appetitus*) のうちにある」(*De Officiis*, I, 101)。

<sup>4</sup> ホップズは『リヴァイアサン』第1部第6章で、*conatus* の英訳に当たる *endeavour* をもとに「欲求ないし欲望」と「嫌悪」を定義し、それぞれを *ὄρμη* と *ἀφορμη* に関連づけている。「この努力 (*endeavour*) は、それを引き起こす何らかのものに向かっている時、欲求ないし欲望 (*appetite or desire*) と呼ばれる。後者は一般的な名称だが、前者はしばしば食べ物に対する欲望、すなわち飢えや渇きを指すように限定される。そして、努力が何らかのものから離れるものである時、それは一般的に嫌悪 (*aversion*) と呼ばれる。これらの単語、すなわち欲求と嫌悪は、ラテン語から採っているものだが、両者とも運動を指しており、前者は近づく運動を指し、後者は遠ざかる運動を指している。それゆえ、*ὄρμη* と *ἀφορμη* というギリシャ語についても同じことがいえる」。なお、スピノザが参照していたと思われる『リヴァイアサン』ラテン語訳の当該箇所では、*endeavour* は *conatus* と訳されている。

<sup>5</sup> ウルフソンはさらにストア派の *ὄρμη* とスピノザの *conatus* を比較した上で、ストア派の *ὄρμη* が動物にしか適用できないにもかかわらず、スピノザの *conatus* は無生物にも適用されると指摘する (Wolfson 1962, II, 199-200)。だがこの比較も適切ではない。ウルフソンがストア派の *ὄρμη* という時、むしろ念頭にあるのは「自然的欲求 (*appetitus naturalis*)」から区別された「動物的欲求 (*appetitus animalis*)」だからである。近世のスコラ哲学者ゴクレンウスによれば、「欲求」は (1) 「植物的なもの (*φυτικόν*)」としての「自然的欲求」、(2) 「感覚的なもの (*αισθητικόν*)」としての「動物的欲求」、(3) 「理性的ないし意志的なもの (*λογικόν seu τῆς βουλήσεως*)」としての「理性的欲求 (*appetitus rationalis*)」の三つに分類されるが (Goclenius 1613, 115)、なるほどこの分類からいえばストア派の *ὄρμη* が「動物的欲求」の枠内に入るのに対して、スピノザの *conatus* はその枠内に収まらないといえる。しかし、ストア派固有の *ὄρμη* は単なる動物的欲求ではなく、もう少し別の限定が加わる。少なくとも初期ストアのクリュシッポスの場合ならば、心のうちに表象が生じ、次いで衝動 (*ὄρμη*) が起こり、その衝動に同意することで行為につながるという、表象・衝動・同意・行為の一連の過程において *ὄρμη* は位置づけられる。それゆえ、ストア派研究の立場からは別の比較が提起されている。ミラーは、生物が生まれるとすぐに自らの自然本性に親和的になる「最初の衝動」としての「親和性 (*οἰκείωσις*)」こそが、スピノザの *conatus* と比較されるべきだと論じる (Miller 2015, 101-3)。また、ロングは個物の自己同一性に関わる生命原理としての「 pneuma (πνεῦμα)」が比較の対象になるかもしれないと指摘する (A. A. Long 2003, 374)。

<sup>6</sup> cf. Bunge et al (2011, 162) および Viljanen (2011, 85)

<sup>7</sup> この問題点はヴィルヤネンの研究にも当てはまる。ヴィルヤネンはウルフソンの研究を土台としつつ、デカルトにおける *conatus* の用例を付け加えるが、やはりキケロからホップズまでの間の *conatus* の用例は挙げていない (cf. Viljanen 2011, 84-91)。

<sup>8</sup> *Epicteti Stoici Enchiridion. E graeco interpretatum ab Angelo Politiano*. Parisiis per Conradum Neobarium Regium in Graecis Typograph. M. D. XL.

<sup>9</sup> *Francisci Porticretensis Commentarii, In Varia Xenophontis opuscula [...]* Excudebat Joannes le Preux. M D LXXXVI, 247.

<sup>10</sup> 以下、近世スコラにおける自然学での *conatus* の用法をまとめる上で、特に Leijenhorst (2002 & 2007) および Garau (2014) を参考にした。

<sup>11</sup> 典型的な例がコインブラ大学のイエズス会士たちが出版した『アリストテレス自然学註解』に見られる。「石が外的な力によって投げ上げられる時、石の形相は下へと向かう自然本性的な傾向力ないし駆動力によって (*naturali conatu, & impulsu*) 上に上がることに逆らう。だが、水が

火によって温まる時、水の形相は冷めることへと向かう本来的な傾向 (*ingenitam inclinationem*)、つまりできるかぎり自らの冷たさを实际的に (*active*) 保存し火の中でさえそうする本来的な傾向によって、温まることに实际的に抗する」(Conimbricense 1602, V.6, *Explanatio*, 202)。

<sup>12</sup> cf. Leijenhorst (2002, 198-200)

<sup>13</sup> これに続く箇所では、コナトゥスが何らかの対象に向かっている時、「欲求ないし欲望 (*appetite or desire*)」と呼ばれ、反対に何らかの対象から遠ざかっている時、「嫌悪 (*aversion*)」と呼ばれるとされる (註4も参照)。ホップズにおいてコナトゥス概念は感情論の基礎とも関わる。

<sup>14</sup> レオはスピノザがカルヴァン主義の中での宗教論争を熟知していたと推定し、『短論文』における「予定」に関する記述をカルヴァン主義の文脈の中に位置づけようとする (Leo 2015)。

<sup>15</sup> 人間身体における運動と静止の割合については、『短論文』第2部序言の註で言及される。

<sup>16</sup> 近世ドイツの神学者ミクラエリウスは、アウグスティヌス以来の伝統を踏まえて、「神の摂理」を三つの活動に区分し、(1)「あらゆる諸事物を前もって知ること (*praescientia omnium rerum*)」、(2)「あらゆる諸事物を見通す企図、決意、意志 (*propositum & decretum & voluntas prospiciendi omnibus rebus*)」、(3)「あらゆる諸事物を現実的かつ時間的に保存し統治すること (*actualis & temporalis omnium rerum tam conservation, quam gubernatio*)」と規定する (Microelius 1662, 1161)。この区分は古代から近世までの神の摂理の規定を包括的に示していると思われる。

<sup>17</sup> Heereboord, *Collegium Ethicum*, 54.

<sup>18</sup> Viljanen (2011, 100-4)

<sup>19</sup> Macherey (1995, 84)

<sup>20</sup> cf. 「個々の諸事物は神の諸属性の諸変状、ないしそれによって神の諸属性がある一定の仕方では表現されるところの諸様態に他ならない」(E1P25C)。

<sup>21</sup> cf. Wolfson (1962, II, 198-9) および工藤 (2015, 320-6)。なお「観念の本質」という言葉自体は『エチカ』にはなく、全著作の中で『政治論』第2章第2節に1箇所用例があるに過ぎない。

<sup>22</sup> Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I<sup>a</sup>-II<sup>ae</sup> q.22 a.3 s.c.

<sup>23</sup> Goclenius (1613, 115)。本稿の註5も参照。

<sup>24</sup> 「第一のもの [=臆見 (*waan*)] からは、善き理性に反するすべての諸情念が生じる。第二のもの [=信念 (*geloof*)] からは、善き欲望が生じる。第三のもの [=明晰な認識 (*klaare kennis*)] からは、真で誠実な愛がそこから派生するすべてのものとともに生じる」(KV 2/2)。

#### [凡例]

スピノザの著作からの引用はゲプハルト版に拠った。ただし『短論文』に関してはミニーニ校訂の羅仏対訳版を用いた。引用個所の表記は慣例にしたがい、『短論文』(略号 KV) および『形而上学的思想』(略号 CM) は略号に続けて部と章の番号を付して表した。『エチカ』(略号 E) は以下の略号を用いて、例えば『『エチカ』第3部定理1証明』は E3P1D となるように表した。

P = *Propositio* (定理)    D = *Demonstratio* (論証)    C = *Corollarium* (系)

S = *Scholium* (備考)    AD = *Affectuum Definitiones* (諸感情の定義)

#### [参考文献]

##### 一次文献

Aquinas, Thomas. 1964-81. *Summa theologiae*, Latin text and English translation, introductions, notes, appendices, and glossaries, Blackfriars.

Cicero, M. Tullius. 1917. *De Natura Deorum*, O. Plasberg (ed.), Teubner.

———. 1913. *De Officiis*, with an English Translation by Walter Miller, Harvard University Press.

Conimbricense. 1602. *Commentariorum Collegii Conimbricensis Societatis Iesu, In octo libros Physicorum Aristotelis Stagiritae*. [...] Coloniae, Sumptibus Lazari Zetzneri.

Descartes, René. 1996. *Œuvres de Descartes* (11 vols.), publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Vrin.

Epictetus. 1916. *Epicteti Dissertationes ab Arriano digestae*, Heinrich Schenkl (ed.), Teubner.

- . 1540. *Epicteti Stoici Enchiridion, E graeco interpretatum ab Angelo Politiano*, Parisiis per Conradum Neobarium Regium in Graecis Typograph.
- Goclenius, Rudolph. 1613. *Lexicon Philosophicum, quo tanquam clave philosophiae fores aperiuntur, Informatum opera & studio, Francofurti, Typis viduae Matthiae Beckeri, impensis Petri Musculi & Rupetti Pistorij.*
- Heereboord, Adrian. 1665. *Meletemata Philosophica*, Amstelodamum, apud Joannem Ravesteinium.  
(※上記は *Pneumatica* と *Collegium Ethicum, in Philosophia Naturalis, Moralis, Rationalis* との合冊)
- Hobbes, Thomas. 1839–45. *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury*, Sir William Molesworth (ed.), Bohn.
- . 1839–45. *Thomae Hobbes Malmesburiensis Opera Philosophica quae Latina Scripsit*, Sir William Molesworth (ed.), Bohn.
- . 1999. *De Corpore*, édition critique, notes, appendices et index par Karl Schuhmann, Vrin.
- Microelius, Johannes. 1662. *Lexicon philosophicum terminorum philosophis usitatorum*, Stetini, impensis Jeremiae Mamphrasii, Bibliop. Typis Michaelis Höpeneri, Reg. Typograph.
- Portus, Franciscus. 1586. *Francisci Porticretensis Commentarii, In Varia Xenophontis opuscula [...]* Excudebat Joannes le Preux.
- Spinoza, Baruch de. 1925. *Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften* (4 vols.), hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter.
- . 2011. *Spinoza Œuvres I Premiers écrits*, texte établi par Filippo Mignini, traduction par Michelle Beysade et Joël Ganault, introduction générale par Pierre-François Moreau, PUF.
- . 1677. *De Nagelate Schriften*, Jan Rieuwertsz.

#### 二次文献

- Bunge, Wiep van et al. 2011. *The Continuum Companion to Spinoza*, Continuum.
- Garau, Rodolfo. 2014. “Late-scholastic and Cartesian *conatus*,” *Intellectual History Review*, 24(4), 479-94.
- Leijenhorst, Cees. 2002. *The Mechanisation of Aristotelianism: the Late Aristotelian Setting of Thomas Hobbes' Natural Philosophy*, Brill.
- . 2007. “Sense and Nonsense about Sence: Hobbes and the Aristotelians on Sense Perception and Imagination,” in *The Cambridge Companion to Hobbes's Leviathan*, Patricia Springborg (ed.), Cambridge University Press, 82-108.
- Leo, Russ. 2015. “Spinoza's Calvin: Reformed Theology in the Korte Verhandeling van God, de Mensch en deszelfs Welstand,” in *The Young Spinoza: A Metaphysician in the Making*, Yitzhak Y. Melamed (ed.), Oxford University Press, 144-59.
- Long, A. A. 2003. “Stoicism in the Philosophical Tradition: Spinoza, Lipsius, Butler,” in *The Cambridge Companion to The Stoics*, Brad Inwood (ed.), Cambridge University Press, 365-92.
- Macherey, Pierre. 1995. *La vie affective : Introduction à l'Ethique de Spinoza III*, PUF.
- Miller, John. 2015. *Spinoza and the Stoics*, Cambridge University Press.
- Viljanen, Valtteri. 2011. *Spinoza's geometry of power*, Cambridge University Press.
- Wolfson, Harry Austryn. 1962. *The philosophy of Spinoza: unfolding the latent processes of his reasoning* (2 vols), Harvard University Press.
- 河井徳治. 1994. 『スピノザ哲学論攷——自然の生命的統一について』, 創文社.
- . 2006. 「コナトゥス概念の原理的諸相」, 『スピノザ協会年報』, スピノザ協会, 第7号, 3-28.
- 木島泰三. 2012. 「『現実の本質』の概念とスピノザ『エチカ』第3部定理6の証明——第1部定理36および第3部定理7との関連において」, 『スピノザ協会年報』, スピノザ協会, 第13号, 105-26.
- 工藤喜作. 2015. 『スピノザ哲学研究』, 学樹書院.